氏　名（本 籍）	松　山　博　明（京都府）
学 位 の 種 類	博　士（スポーツ科学）
学 位 記 番 号	甲 第 ２３ 号
学 位 授 与 日	平成28(2016)年3月17日
学位授与の要件	大阪体育大学大学院学位規程第４条第１項該当
研　究　科　名	スポーツ科学研究科（博士後期課程）スポーツ科学専攻
論　文　題　目	海外派遣サッカー指導者に関する心理学的研究： 異文化におけるコーチングの視点から
審　査　委　員	主　査　　教　授　土　屋　裕　睦
	副　査　　教　授　荒　木　雅　信
	教　授　前　島　悦　子

論文内容の要旨

本研究では,海外派遣サッカー指導者の実態を明らかにすることを目的とした.具体的にはコーチング環境の現状を明らかにすることと,同時にそこで指導者が体験する異文化での心理的変容過程を探求することを研究課題とした.

序章では,コーチングを「競技やチームを育成し,目標達成のために最大限にサポートすること」と定義した.指導現場の実態解明のためにトレーニングメニューの分類とコーチング課題を設定した.コーチング課題は,大会前の準備期間中において,選考,トレーニング期間,移動,調整の4項目,試合期間中においては,体力面,技術面,戦術面,心理面の4項目とした.また, 2 つの研究課題にアプローチするため,本研究では量的および質的研究法を採用することとした.

第 2 章では海外派遣サッカー指導者の体験をつぶさに記述するため,事例研究を行った.対象は海外派遣サッカー指導者 1 名であり,ブータンにおける約 1 年半にわたるコーチング記録をもとに,コーチング環境の実態を明らかにした.その結果,スタッフ数,施設および選手の競技能力などにおいて,日本とは大きく異なることが示唆された.さらに指導者は異文化において,それぞれの時期に様々なストレスを抱えることが明らかとなった.

第 3 章では,ブータン以外の国のコーチング環境の実態を把握するために, FIFA ランキング上位・中位・下位別に実態の調査を行った.その結果,ブータン同様,アジア貢献事業の対象国のスタッフ数や施設といったコーチング環境は,日本とは大きく異なることが明らかになった.さらに選手の競技能力においては,ランキング下位群は上位群に比べ体力得点と心理得点において劣っていることが明らかになった.他に,技術得点でも「簡単にボールを奪われない」という項目においては上位群と下位群に違いが見られた.

次に第 4 章では,下位群による初めて海外に派遣されたサッカー指導者 3 名に対するインタビュー調査から,異文化体験を複線径路・等至性モデル(TEM)によって可視化した.その結果,異文化適応過程は,以下に示すキャリア形成プロセスの4段階サイクルに基づいて捉えることができた.

①決断の時期では,アジア貢献事業の公募の後,いずれの指導者も落選した場合,再就職先を探さなくてはならないストレスや家族への責任感による気持ちから人事選考への不安感を抱いていた.赴任決定後,指導者は JFA での手続きや現地の情報収集や準備を行っていくうちに,新天地での期待と不安感が高まっていった.

②文化適応と挑戦の時期では,赴任時,いずれの指導者も新天地での期待と不安感があった.しかし,トレーニングを重ねていくうちに,サッカーのレベルの低さと,選手が規則を守らないという意識の低さから,落胆の気持ちに変わっていった.また, 1 回目の国際大会出場前,大切な時期にも関わらず,就労ビザ取得の影響による問題から, 1 か月近く帰国しなければいけない事態にストレスを感じた指導者が存在した.このことから,指導者が,日本では普段から当たり前に考え,実施していたことが,赴任先では全く機能しなくなったことによって,心理的ストレスが大きくなった.

③葛藤と試行錯誤の時期では,1度目の国際大会出場によって,惨敗の結果に終わった指導者は,異国の地でのマスコミや周りからの非難や中傷を受け,大きなストレスを感じた.また,指導者は 2 度目の国際大会出場前に,国内の移籍問題で思うように選手が獲得できない強化システムによる影響や,国内のリーグ戦中,宗教上の儀式を行うために試合時間が大幅に変更されたこと,またチームの仕事に非協力的なスタッフがいたことによって,大きなストレスを感じた.

④振り返りと新たな目標の時期では,指導者が 2 回目の国際大会出場し,帰国した後の時期であった.帰国後の指導者は,多くのストレスを抱えたにもかかわらず,海外派遣先での経験をネガティブに捉えていなかった.むしろ,いずれの指導者からもこの経験によって得られた満足感や自信を感じ取ることが出来た.このことから,指導者は,家族や友人などの“深い人間関係”,国際大会などの経験による“新しい価値観”,大きな困難を乗り越える“自己の強さ”を認識し,非常に挑戦的な人生の危機でもがき奮闘した結果起こるポジティブな変化の体験をした.

以上をもとに,第 5 章では総括を行った.海外派遣サッカー指導者は,日本とは大きく異なるコーチング環境から多くのストレスに直面していた.そのストレスに対して,もがき苦しむ中でレジリエンスを発揮し,乗り越えていることが分かった.本研究ではこれまで明らかにされてこなかった海外派遣サッカー指導者のコーチング環境の実態と,そこでの心理的変容過程が明らかとなった.この知見はアジア貢献事業のみならず,異文化における心理的適応過程の解明にもつながると期待された.

審査結果の要旨

（論文審査）

日本サッカー協会はサッカー指導者の海外派遣等、アジア貢献事業を積極的に推し進めている。しかしながら、そのコーチング環境の実態や異文化での適応過程に関する基礎資料は十分に得られていない。そこで本研究では、海外派遣サッカー指導者の実態を明らかにするため、事例研究による実態調査（研究１）、質問紙調査を用いたコーチング環境の探求（研究２）、インタビュー調査による心理的変容過程

の検討（研究３）を行った。

研究１では、ブータンに派遣されたサッカー指導者１名の約１年半にわたるコーチング記録をもとに事例研究を行った。その結果、コーチング環境および選手の競技能力が日本とは大きく異なり、指導者は異文化において様々なストレスを抱えることが明らかとなった。研究２では、研究１を受けてブータン以外の国のコーチング環境の実態を把握するために、海外派遣サッカー指導者 24 名に対して質問紙調査を実施した。国際比較の結果、FIFA ランキング下位群では、施設やスタッフ数等のコーチング環境が劣悪で、選手の競技力も低いことが明らかとなった。そこで、研究３では下位群に分類された国に派遣された指導者３名に対して、詳細なインタビュー調査を実施した。聞き取った内容を複線径路・等至性モデル (TEM) によって可視化したところ、異文化適応過程はキャリア形成プロセスの4段階サイクルに基づいて捉えることができた。以上から、海外派遣サッカー指導者は、日本に比較して劣悪なコーチング環境において多くのストレスに直面し、さらに文化的・宗教的な異文化において適応を余儀なくされることが分かった。その中でレジリエンスを発揮することで解決策を見出していることが確認された。

論文審査の結果、これまで明らかにされてこなかった海外派遣サッカー指導者が直面するストレスの具体的内容と、異文化における適応過程についてその実態を明らかにしたことが評価された。また理論と実践の往還を図るため、質的研究と量的研究を組み合わせていることも独創的であると評価された。

（最終試験）

提出論文をもとに、関連する事柄及び発表会での質疑に対する応答の内容を中心に、口頭試問を行った。具体的には、①用語の定義、②事例研究における客観的な判定基準の有無、③異文化の視点から考察の必要性について質問したところ、的確な回答があり、提出された論文においても適切に修正がなされていることを確認した。また関連する事項についても十分な回答がなされた。以上から、博士の学位授与の基準を満たしていると判断されたので、合格と判定した。